

人間福祉研究科報

■博士学位論文・修士学位論文

◆2016年度

〔博士学位論文〕

- 植戸 貴子 知的障害児・者の母親によるケアから社会的ケアへの移行に向けた相談支援
～実態に基づく脱親のための実践ガイドの作成～
- 曾田 里美 児童養護施設におけるライフストーリーワーク実践の現状分析と推進要因に関する研究
- 栗山 直子 子ども虐待と“家族規範”に関する実証的研究

〔修士学位論文〕

- 齋藤 市子 地域で暮らす精神障害者のスピリチュアルベインと希死念慮に関する実証研究
- 宇野 剛司 医療ソーシャルワーカー増員の背景要因
－人材確保に至るプロセスを通して－
- 金 大賢 高齢者の社会的孤立にアプローチする社会的企業の役割について
－実践事例を通じて－
- 胡 宝奇 中国都市部における高齢者の在宅サービス利用意向及びその関連要因
－「社区」特性と社会的ネットワークを中心に－
- 高橋 耕生 青年期における故人観
～自我同一性および愛着との関連～
- 原見 美帆 地方自治体におけるグリーフケアの実態と事業発展要因の検討
～自死遺族支援事業から地域支援体制構築に向けて～
- 眞崎可奈子 不登校経験者のその後の歩みの中の「ゆらぎ」
－当事者視点から捉える不登校経験の長期的変容プロセス－
- 松端 真美 知的障害児の親のスピリチュアリティ
- 安井 優子 東日本大震災による死別体験者が苦しみの中で求めるもの
- リ カン 要介護高齢者の旅行に対する支援活動の現状と課題
－NPO 法人「しゃらく」の活動を通じて－

(学位授与日・五十音順)

■人間福祉研究科優秀修士論文賞「駒草賞」

人間福祉研究科では、故 高田真治 名誉教授（2006年12月14日ご逝去）のご遺族から受納した寄付により、優秀な修士論文を執筆した博士課程前期課程の学生の努力と業績を称えるため、優秀修士論文賞「駒草賞」を設けています。

名称の由来は、駒草（ケマンソウ科の多年草、高山植物の一つ）を故人が好まれたことによります。

最優秀賞には表彰状と副賞5万円、優秀賞には表彰状と副賞3万円が贈られます。

2016年度の受賞者は次のとおりです。

・最優秀賞

安井 優子

東日本大震災による死別体験者が苦しみの中で求めるもの

・優秀賞

宇野 剛司

医療ソーシャルワーカー増員の背景要因
－人材確保に至るプロセスを通して－

胡 宝奇

中国都市部における高齢者の在宅サービス
利用意向及びその関連要因 －「社区」特性と社会的ネットワークを中心に－

原見 美帆

地方自治体におけるグリーフケアの実態と
事業発展要因の検討 ～自死遺族支援事業
から地域支援体制構築に向けて～

松端 真美

知的障害児の親のスピリチュアリティ

人間福祉研究科優秀修士論文賞規程

（目的）

第1条 学校法人関西学院は、高田睦子氏（故高田真治社会学部名誉教授夫人）よりの寄付金をもって、人間福祉研究科優秀修士論文賞（駒草賞）を設定する。

2 この賞は、人間福祉研究科学生の研究意欲を刺激し、その向上をはかることを目的とする。

（資格及び交付）

第2条 この賞は、毎年人間福祉研究科において優秀な修士論文を執筆した学生に授与する。受賞者を毎年若干名とし、受賞者には賞状と副賞を授与する。

（所管及び運営）

第3条 人間福祉研究科に優秀修士論文賞（駒草賞）選考委員会を設け、受賞者の選考に当たる。

2 選考委員会の構成及び選考方法については別に定める。

（規程の改廃）

第4条 この規程の改廃は、選考委員会の議を経て、人間福祉研究科委員会で決定し、理事会の承認を得るものとする。

附 則

この規程は、2008年（平成20年）11月1日から施行する。

〔2016年度 人間福祉研究科優秀修士論文賞・最優秀賞 要旨〕

東日本大震災による死別体験者が苦しみの中で求めるもの

安井優子

1. 研究の目的と意義

2011（平成23）年3月11日に発生した東日本大震災では、15,000人を超える多くの死者が出た。震災後、被災地では、被災者に対する心のケアが重視され、様々な自殺予防対策が講じられている。しかし、被災者の孤独や不安の増大等により、今後も自殺者数は増加する可能性が指摘されている。震災に関連する自殺の原因としては健康問題が最も多いと報告されている（Website 内閣府自殺対策推進室）。

世界保健機構（WHO）では、健康を「身体的・精神的・社会的側面がすべて満たされた状態」（公益社団法人日本WHO協会）と定義しているが、新たにスピリチュアルな領域の追加を検討している。藤井（2013）によると、スピリチュアリティは「人間の尊厳の確保やQOLを考える為に必要な本質的なもの」である。

震災・津波というどうすることもできない出来事に直面し、自分のいのちさえ危機に晒される状況下で、愛する人との死別を体験し、悲嘆を抱え生きる人がいる一方、自らのいのちを絶つ人がいる。その背景には、スピリチュアルペイン、つまり自己と自己・他者・人間を超える大いなるものとの関係性の中で「生きる意味や関係性が見出せない苦しみ」（藤井，2010）が関与しているのではないかと筆者は考える。

本研究は、人が苦しみの中で求めるものは何かを明らかにすることを目的とする。それにより、同じ社会・共同体の一員として生きる筆者たちが、その苦しみにいかに寄り添っていくことができるか、今後の課題を提案し、スピリチュアリティの視点を視野に入れたところのケアのあり方について貢献できればと考える。

2. 文献研究

「人間の存在を支える根源的な領域」（藤井，

2010）であるスピリチュアリティ、「生きることや自己存在そのものが揺るがされるような根源的痛み」（藤井，2013）であるスピリチュアルペインの概念を示唆する理論として考えられるフランクルの意味への意志、マスローの存在価値（Being-Values）について文献をレビューした。また人間存在や人間の絶望に関するキルケゴールの理論、死別による悲嘆過程を理解する上で重要と考えられる悲嘆モデルの変遷について文献をレビューした。そして、藤井ら（2005）、渡邊（2001）、寺沢ら（2014）の実証研究レビューから、スピリチュアルペインに対する主観的な意味づけにおいては、自己の規範や他者・人間を超越するものとの関係性、宗教や信仰が影響することが示唆された。

また、それらのことから、被災者の苦しみを理解する上で重要と考えられる、スピリチュアリティの領域に関連する東北地方の宗教文化と死生観について文献をレビューした。その結果、東北地方の豊かな自然環境と、日本人が古来より持つ先祖崇拝の信仰、また後から伝来された禅宗宗派等の仏教とが融合し、東北地方の人々の宗教的信条、死生観の根幹を形成しているのではないかということが示唆された。

3. 調査デザイン

本研究では、Modified Grounded Theory Approach（以下 M-GTA と略す）を用い、インタビュー内容の分析・考察を行った。筆者が分析方法として M-GTA を採用した理由は以下の通りである。1点目は、M-GTA が「ヒューマン・サービス領域、実践的な領域に最適で、社会的相互作用に積極的な意味をもたせること」（木下，2007）が可能であり、また「研究対象者自体がプロセスの特性をもつ場合に適した、ある“うごき”を説明する理論を生成する方法で、研究結果の実践的

活用が期待される場合」(木下, 2007) に適する点である。2点目は、M-GTA が調査対象者の語りを細かく切片化しすぎず、その文脈を大切に統合的に捉え、意味の解釈を行う点である。3点目は、M-GTA が「社会的相互作用に関係し、人間行動の予測と説明に関わり、同時に、研究者によってその意義が明確に確認されている研究テーマによって限定的に設定された範囲内に関する限り、他のどのアプローチによる研究よりも説明力に優れている」(木下, 1999) 点である。上記3点の理由により、筆者の研究目的を明らかにする上では、M-GTA が適していると判断し採用した。

また、調査協力者は、M-GTA による理論的サンプリングにより、東日本大震災・津波による愛する人との死別経験者であるという条件以外、年齢や性別、死別人数やその関係性(配偶者、親子等)等の属性については、分析過程でそれらを条件づけることの重要性が上がらない限り、設定しないこととした。

本研究の調査協力者は、東日本大震災後、宮城県栗原市曹洞宗通大寺の僧侶・臨床宗教師である金田諦應老師らが始めたカフェ・デ・モンク(傾聴移動喫茶)に参加したことがある、愛する人との死別体験をした被災者に限定し選定を行った。その理由としては、宗教と聞くと懐疑的な印象を抱くことが多い日本ではあるが、元々宗教への親和性が高い東北地方において、宗教者が宗教・宗派の枠組みを超え、実際どのように協働し、アウトリーチでの傾聴活動、スピリチュアルケアを行っているのみに強く興味を抱いた為、またそこに集う死別体験をした被災者に、直接言葉を聴かせて頂きたいと考えた為である。

本研究では、カフェ・デ・モンクに参加したことがある死別体験者2名を対象とした半構造化面接によるインタビュー(2016年6月~8月実施)の逐語録と、カフェ・デ・モンク(2016年5月~7月計4回)や秋田県の西音馬内盆踊りでのフィールドノーツ、資料をデータとし、M-GTA による分析・考察を行った。

本調査における分析テーマについては、データと照合し推敲を重ねた結果、最終的に「東日本大震災・津波で愛する人を喪った人が、その苦しみ

を抱えながら生きてきた5年間のプロセスの中で求めてきたものは何か」とした。また、本調査における分析焦点者は「東日本大震災・津波で愛する人との死別体験をした人」と設定した。

4. 分析結果・考察

M-GTA を用い繰り返し分析を行った結果、最終的に14の概念、4のサブカテゴリー、3のカテゴリー、1のコアカテゴリーが生成された(以下、生成されたサブカテゴリーは《 》、カテゴリーは【 】、コアカテゴリーは[]で示す)。

分析テーマに対し、生成されたコアカテゴリーは「苦しみに対し自分なりに意味を見出すこと」であった。

そして、分析結果から、東日本大震災・津波により愛する人を喪った人がその後の人生において抱えてきた苦しみとは、スピリチュアルペインであるということが明らかになった。

突然の震災・津波により、それまで培ってきた価値観や社会関係が一気に崩壊し、それらの再編を余儀なく強いられた上、突如として愛する人を奪われ、強い悲嘆を抱え生きる被災者が、その無常ともいえる出来事に対し、この5年間のプロセスの中で求めてきたこと、それは、たとえ震災・津波で負傷した身体を治療やリハビリにより回復できたとしても、プレハブの仮設住宅から鉄筋コンクリート建築の復興住宅へ移り安心して暮らせるようになったとしても、また、仕事に就き社会的に安定した生活が営めるようになったとしても、それだけでは満たされない「もっぱら人間であるがゆえに生じる痛み」(藤井, 2013)である実存的苦しみ、すなわち、スピリチュアルペインであった。スピリチュアルペインとは「自己存在、生きること、いのちそのものの意味を、自己と自己・他者・人間を超える大いなるものとの関係性の中で見出すことができず、自己存在そのものが根底から揺るがされる痛み」であり、その特徴の1つには「生きる人の根底に必ず存在する、全ての人が人間の本質としてもっているもの」(藤井, 2015)であるという「普遍性」がある。

筆者は、本研究を通して、災害の規模や地域に関わらず、人間の苦しみの根源には、スピリチュアルペインが普遍的に存在するということには変

わりがないという知見をあらためて得た。

また、その痛み、スピリチュアルペインを癒すには、【人との温かい交流】といった自己と他者との関係性、【宗教性の提示への希求】といった自己と人間を超える大いなるものとの関係性、またさらには《大いなる自然と自己との調和》といった、人間を超える大いなるものとの関係性を通し、【自己と向き合うこと】といった自己と自己との関係性、そのような様々な関係性が相互に影響を及ぼす中で、[苦しみに対し自分なりに意味を見出すこと]が鍵となることがわかった。

そして、東北地方では、豊かな自然と、宗教と、人々の暮らしとが、地域一体の文化を織りなしており、その地域に土着化した独自の文化は、苦しみの意味づけに影響を与える大きな背景要因の1つであるといえることがわかった。

また、金田老師らによるカフェ・デ・モンクの活動は、東日本大震災・津波で、それまで1人ひとり、それぞれに人生の物語の歴史的背景の中で培ってきた価値観・社会関係が、一気に破壊され、様々な痛みを抱える人々の、【人との温かい交流】、【宗教性の提示への希求】、【自己と向き合うこと】、その全ての求めに、躍動的にしなやかに寄り添い、共にその痛みを背負い悶絶し、一人ひとりがその「苦しみに対し自分なりの意味を見出し」、自分の人生の物語を再生していきけるまでのプロセスをつなぐ、かけがえのない、大変意義深い重要な活動であることがわかった。

加えて、本研究における分析焦点者にとっての「限界状況」という現象は、震災による死別後5年という時間的プロセスの中で抱えてきたそれぞれのスピリチュアルペインに対し、自分なりに答えを見出せない苦しみに支配され、その苦悩がピ

ークに達する状態を指すといえるのではないかとということが示唆された。

5. 提言

本研究の結果から、援助者として、震災・津波で愛する人を喪った被災者のこころのケアを考える上で、またあるいは、同じ共同体の一員として生きる者として死別の悲しみに寄り添って生きていく上で、まず、人間には自己存在や生きる意味に関わる根源的な痛みであるスピリチュアルペインが在るということを理解しておくことの重要性を提言した。

それと同時に、人間は何らかの関係性の中で生きる社会的な存在であるからこそ、スピリチュアルペインに対する答えは決して自分ひとりで見出すことができないこと、「苦しむ人にとって、丸ごとありのままの自分の存在を受けとめてくれる人との関係性が、自分なりの苦しみの意味づけを行っていく上で、何よりも力強い支え」(藤井, 2015)となることを述べた。

また、筆者は、金田老師ら臨床宗教師の活動は、被災地域・共同体における「スピリチュアリティに配慮したソーシャルワーク (Spiritually-Sensitive-Social Work)」(カンダ, 2014)実践であると共に、宗教者としての固有の役割を兼ね備えており、人と人との関係性が希薄化している現代において、今後は被災地や医療機関、福祉施設のみならず、社会全体の中で、人々がその痛みに対し自分なりに意味を見出していくことが可能となるよう、共に伴走し、真に寄り添ってくれる臨床宗教師のような人の存在が益々必要と予測されることを示した。